

こころの玉手箱



身の回りの文房具を、人はいったいのくくらい長いあいだ使ってたろうか。わたしのペン立てには、60年前のペーパーナイフが入っている。「こころの玉手箱」という題でまず思いつくのはこれである。

と、大げさに紹介するような代物ではない。裝飾を施した中世風の剣の

60年前のペーパーナイフ

形をしており、ビニールの鞆に収められた、ただのおもちやである。柄のところにピンクの寶石？が埋め込んであるが、片側はいつの間にかとれてなくなっている。今でこそ柄の部分はくすんでいるが、クロームメッキの剣身はなお輝きを失っていない。

小学生のわたしはこれを

町の文房具屋で見つけ、何としても欲しくなり、お小遣いはたいて買った。たしか500円だったと思う。当時のわたしにとっては大金だったが、とにかく美しくて、かっこよくて、ぴかぴかに光っていて、本物の剣みたいに見える。それが何の役に立つのかなど、考えもしなかった。た

持っているだけでうれしい

もりもと・あんり 1956年生まれ。神学者、東京女子大学学長。国際基督教大学教授、学務副学長を経て2022年より名誉教授。近年の著書に『反知性主義』『不寛容論』『魂の教育』など。

だ欲しくて手に入れた。「持っているだけでうれしい」と思えるものを、今のわたしはどれだけ持っているだろうか。

「60年間使っている」といのはちょっと言い過ぎ

かもしれない。何せ、小学生はペーパーナイフなんて使わない。郵便物の封を開けるくらいしか使い道はないのだから、実際に使うようになったのは毎日いろいろな封書が届く大人になってからのことだ。

やがてわたしが老境を迎え、郵便物のデジタル化がさらに進めば、この小さな宝物も再び無用になるだろう。

その同じ文房具屋で、もう一つ思い出がある。万年筆のテレビコマーシャルで大橋巨泉が言う言葉を感じ

え、店主の前で間違わずに復唱すると賞品がもらえる、というのだ。何をもらったのかは記憶にないが、おかげでそのフレーズは今でもそらで言える。「みじかびのきやぶりきとればすぎちよびれ すぎかきすらの はっぱふみふみ」——覚えておられるご同輩も多いのではないか。猥雑な活気に満ちた昭和の時代だった。

あのCMが大流行したのは、和歌という典雅な伝統と権威の形式がパロディ化され、大胆に大衆化されているからだろう。10年ほど前に『反知性主義』（新潮選書）を書いたとき、日本にはどんな反知性主義者がいるかと問われて答えに窮したが、今思い返してみると、大橋巨泉はその一つの典型だったと言えるかもしれない。



小学生のときにお小遣いをはたいて買った